

校庭の生物をもちいた環境教育の実践事例 ～宮城教育大学附属小学校でのフレンドシップ事業実践から～

島野智之*・菅原 崇**

The Practice of Environmental Education with Bugs in the Schoolyard Friendship Program:
A Case Study on Students of MUE and Children of MUE attached Elementary School

Satoshi SHIMANO and Takashi SUGAWARA

要旨：本研究では、フレンドシップ事業の趣旨に基づいて、受け入れ側を宮城教育大学附属小学校1年1組(36名男女18人ずつ)とした。テーマとして、「校庭の生物」を設定した(受け入れ側授業は小学校1年「生活科」)。学生と受け入れ側小学校児童との交流のためにプロセス(過程)を4段階に設定した。このプロセスでは、準備と学習、実践終了後の小学校担任との議論から、野外において、小学校児童と触れ合うことについて考えた。なお、フレンドシップ実践のための準備は、環境教育bの授業を通して行った。

キーワード：フレンドシップ事業、校庭の生き物、クイズ、カード

1. はじめに

フレンドシップ事業とは、斉藤・見上(2000)によれば、その概要は「将来教職に就こうとする大学生に対して、在学中から小・中・高等学校の児童・生徒と交流する機会を与えることにより、教員としての資質向上を目指す」ものであり、また、「平成9年度より文部省の助成が開始され、本センターでも同年度から実施している」。フレンドシップ事業は原則として、大学の講義、実習などとリンクして行われる。本センターでは、講義科目「環境教育b」(前期2単位、全学年対象)の受講生を対象とし、通常の講義と合わせてフレンドシップ事業としての実践を行った。

9年目にあたる平成18年度は、その事業の取り組みの中で、校庭の生物および土壌動物を材料として実施した。本報告では、主に大学生側の実践記録として述べる。

1) 宮城教育大学の学生と宮城教育大学附属小学校の児童

講義科目「環境教育b」の受講者45名のうち安全性、指導が行き渡ること等を考慮し、3班を編制した。

著者のうち島野は、宮城教育大学の教員として「環境教育b」を担当するが、島野の受け持つ班は14名(男性4名;女性10名)であった。本班14名の大学生のうち1名の4年次学生を除けば、全員が1年次学生であり、また、大学に入学して、はじめて授業を履修した大学生達であった。

他方、受け入れ側の宮城教育大学附属小学校は、菅原(著者のひとり)が担任する1年1組36名の児童、男女18人ずつの構成であった。

ここで留意する点は、大学生は教員養成大学に入学してすぐの時期であり、まだ、教育実習なども未体験の学生であること、他方、小学校でも入学して間もない一年生であり、十分に小学校に慣れているとは言えないのではないかという心配があった。

2) 実践の目的

大学生は、身近な自然を材料として、児童にこれを教えるという過程で、①自分自身が自然を教育教材のひとつとして、その教材について研究・調査する姿勢を学ぶ、②身近で日常的に何の疑問も興味もなく接し

*宮城教育大学附属環境教育実践研究センター, **宮城教育大学附属小学校

てきた自然への驚きの目を自らも養うこと、③入学初期段階で小学生と野外で接することで、小学生への授業の難点や興味に気づくことという目標を設定した。

小学生児童は、生活科の内容の一つである「身の回りの自然や生き物とかかわる」ということについて、通常的生活科の授業では、児童が主体で、自分たちで考え気づくことを大切にしている。しかし、大学生と一緒に触れ合いながら、野外で、生物を前にしながら担任以外の大学生から情報を受け取ることを、授業として一度体験することによって、むしろ、自らが調べる方法のヒントにしたり、生物の知識への探求心を養ったりすることを目的とした。

2. プロセス（過程）の設定

宮城教育大学附属小学校の協力を得て、フレンドシップ実践を行うためのプログラムを計画した。大学生と受け入れ側児童との交流のためにプロセス(過程)を4段階に設定した(図1)。なお、フレンドシップ実践のための準備は、毎週の環境教育bの授業を通して行った。

プロセスIでは、大学教員(島野)が自ら児童と接する機会を持ち、児童が安心して大学生と触れ合える関係の基盤を作った。プロセスIIでは、児童の授業を利用して、大学生が自己紹介を行った。この過程では、2点について留意した。①大学生自身が大学に入学したばかりであり、児童に教えるという立場の体験は初めてである。②児童が前もって大学生と顔を合わせて安心して。また、このときに、校庭の生き物とし

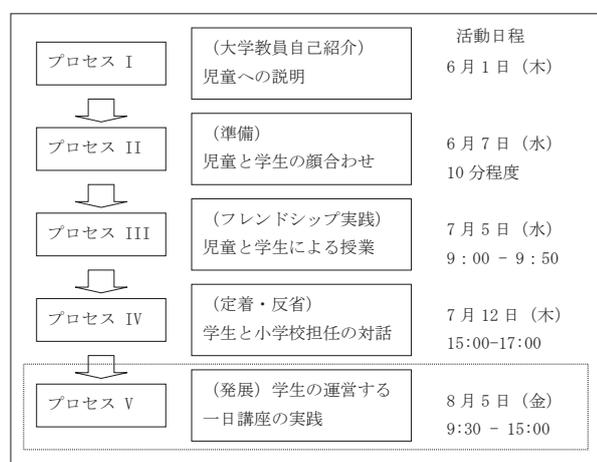


図1. 2006年度のフレンドシップ実践プロセス.

て、附属小学校の校庭にはどのような生き物がいるのかを調査し、何を題材にするのかを大学生自身が考える材料とした。プロセスIIIでは、それまでの大学内の授業時間で用意した校庭の生物に関するクイズを用いて、児童とフレンドシップ実践をおこなった。プロセスIVでは、学生が自ら児童への接し方について、感想や反省点を、担任の菅原(著者のひとり)と正味1時間30分程度の対話を持つことによって、今後の教員養成課程での課題に気づき、またフレンドシップ実践中にえられた気づきについての定着を行った。

また、発展として、授業履修者のうちから希望者を募り、プロセスVでは、これらを活用して、気仙沼市立教育委員会の協力を得て「気仙沼子ども環境学習教室」を開催した。詳細は資料に示した。

3. テーマ「校庭の生き物」

まず、プロセスI(図1)として、島野が大学教員として附属小学校を訪問し、45分間、1年1組の生徒と触れ合う時間をつくった。また、実践の現地を調査した。これをふまえ、大学生とのフレンドシップ実践に移った。

まず、附属小学校校庭を場として選び、ここに生息している生物を対象に、フレンドシップ実践を行うことを大学生への課題とした。テーマとして、「校庭の生物」を設定した受け入れ側の小学校1年生の授業では「生活科」であるため、大学生には、「生活科の授業とは、生き物や植物を育てたりして、それらが育つ場所・変化の様子・成長の様子に関心を持ち、またそれらは生命をもっていることや、成長しているごとに気づき、生物への親しみをもち大切にすること、という平易な解説を加えた。

本班の大学生は、どのような生き物が対象になるか、現地の取材を希望したため、現地取材の後(プロセスII)、話し合いによって、昆虫、土壌動物などの校庭の生物5種程度(アメンボ・蜘蛛・アリ・ミミズ・ダンゴムシ)のそれぞれについて、クイズの書かれたカードを作り、実際に校庭に生息する生物を探索し見つけ出すことを、一つめの課題とした。次に、作成されたクイズをもとに、5種の生物それぞれについての簡単な実験をとり入れることで、生物への興味と観察力を

養うことを、大学生自身が考え出した。また、5種すべてについて触れ、時間内に終わらせることとした。

4. プロセスⅡ「大学生と小学生の顔合わせ」

大学生が小学校に出向き、10分の時間を設定し、自己紹介を行ったが、小学生がむしろ、附属幼稚園からの児童が半数を占めるため、大学生にはある程度慣れていて、一方、大学生は自分がどのように振る舞って良いものか悩む者もいたが、数名の大学生は思い切って自分を演じて見せることが出来た。いずれにしても、大学生にとっては驚きと喜びに満ちて、教育大学に来たという実感が初めて生まれたという様子であった。

実践をおこなう校庭の視察を同時に行ったが、自分たちの予想しているような生物の多い場所ではなく、一見して何も生き物が生息していそうにない場所に、とまどっていた様子が見られた。

5. 実践の準備「校庭をどのように使うか」

大学生たちは、実践現場の下見から、本当にごく身近な生き物を材料にすることに、とまどいを感じていたが、まずは対象となる生物を決めた上で、生物について調べ、相互に発表やクイズを出すという、予備的実践をおこなった。14名の大学生は5つの班として2～3名ずつに分かれ、5つの分類群の生物それぞれについて担当した。

ここで、強調したいのは、特殊な生物種ではなく、身近にある何も特徴のない校庭に生息する生き物（動物）を、大学生が題材にすることが大切であり、学生が実践のなかで、「実践のネタづくりをするためには、どうすればいいのか」ということをごくありふれた生物を材料にして考えることを重視した。

6. 大学生相互の発表会

まず、大学生自身で、校庭の生き物を中心に調べてみる。それを、お互いに発表することをおこなった。大学生の多くは生物について「調べもの」をしたことがないものが、ほとんどであった。自主的に、大学生が主体となって、対象とする生物に焦点を合わせることを学ぶために、班ごとに、①対象とする生物を校庭

に生息している動物分類群に決めること、次に、②決めた生物種について調べ物をするをおこなった。また、③調べた事柄をもとに、クイズをつくってみることをこころみた。

次の週には、お互いに発表会を行い、それぞれの疑問点を投げかけ、また、クイズを実際に、大学生相互で問いかけてみることで、小学1年生に適切なクイズかどうかを議論し合った。また、クイズと合わせて実験などを行う方が良いという意見が出た。

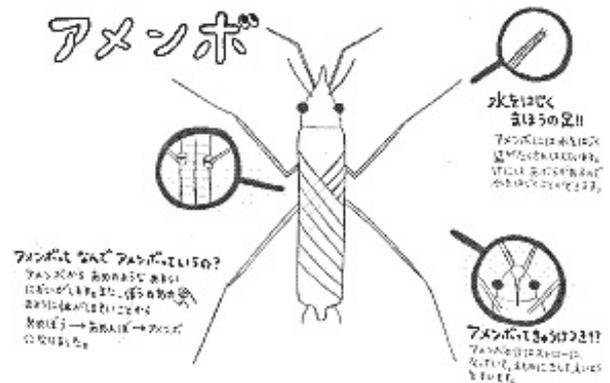


図2. 大学生の事前相互発表にもちいた資料 (アメンボについて).

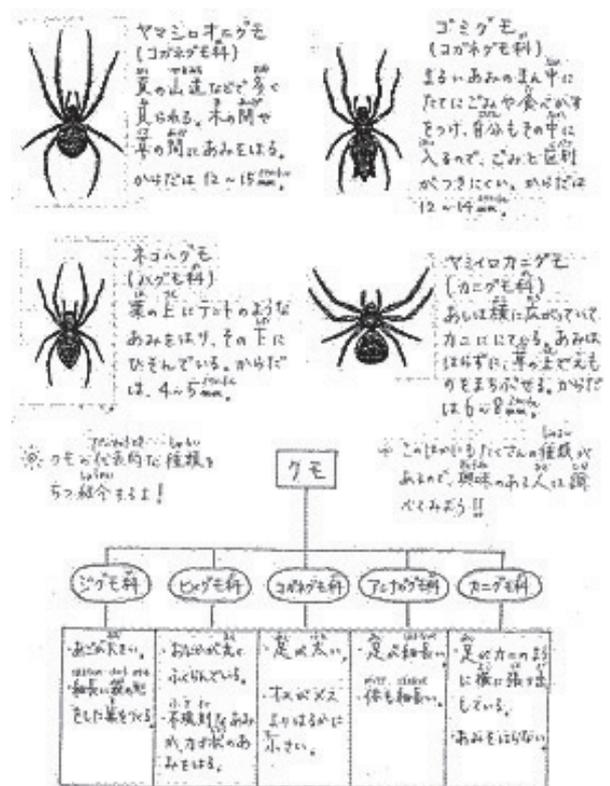


図3. 大学生の事前相互発表にもちいた資料 (クモについて).

7. 動物（昆虫類）の取り扱い実験

大学生は、実際の生き物を材料に、クイズの中で行う実験について、大学キャンパス内に生息する動物（昆虫類）を、実際に採集して、これを試みた。

その一例は、「アメンボを浮かべた紙コップに洗剤を滴下するとどうなるか」という物である。アメンボは、なぜ水の上に浮かぶか、足の先からワックス状の分泌液を出しているためであるが、これに、洗剤を滴下すると、ワックスの効果が失われ、アメンボが水に浮かべなくなってしまう。このことを児童に理解してもらうことを目的として、キャンパス内の池からアメンボを採集して、実際にこれを試した。結果は、アメンボが、紙コップの中に沈んでしまい。その意外性にクイズを考案した大学生も驚きの声を上げた。

8. プロセスⅢ「フレンドシップ実践」

以上、大学内の授業時間で用意した校庭の生物に関するクイズを用いて、児童とフレンドシップ実践をおこなった。

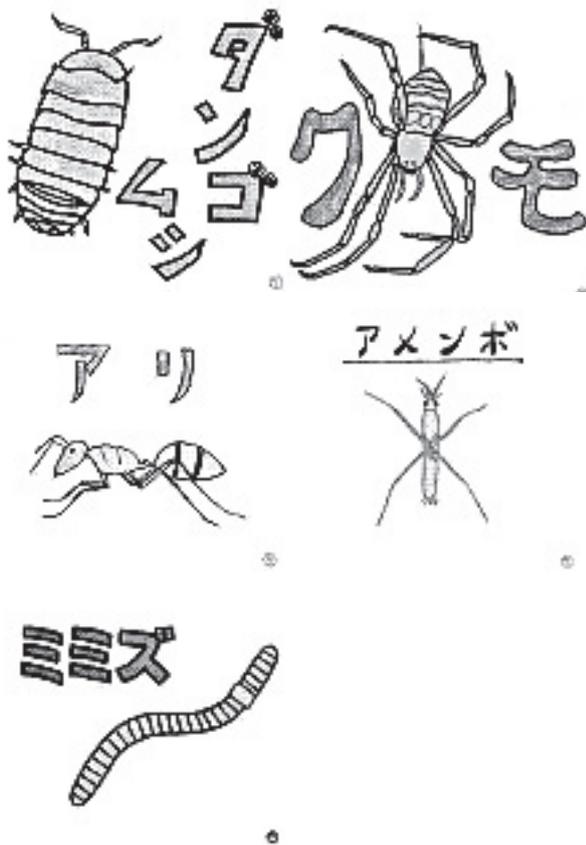


図4. 実践にもちいた抽選カード

昆虫、土壌動物などの校庭の生物5種程度（アメンボ・蜘蛛・アリ・ミミズ・ダンゴムシ）について、クイズの書かれたカードを作った、またクイズを作成し、この問題を実際に校庭に生息する生物を探索し、簡単な実験することで、生物への興味と観察力を養った。

くものクイズ 

Q1. 日本には、クモは何種類いる？
 ① 15種類 ② 150種類 ③ 1500種類 ④ 15000種類
 → A. ③ 1500種類

Q2. くもはどのようにやって高いビルに登る？
 ① 人の肩に乗って登る。
 ② 風によって登る。
 ③ 自分でビルを登る。
 → A. ② くもの子供は流した糸に乗って空を飛ぶことができます。

マク知識Q
 くもは害虫ではなく益虫です。アシダカグモはゴキブリを食べてくれます。

●○ミミズの問題●○

Q1: ミミズには目がありますか？
 A1: ない。代わりに体の表面で光の強弱を感じ、目の役割をする。

Q2: ミミズには鼻がありますか？
 A2: ない。唇の先で触って味をみる。
 唇には「センス・オーガン」と呼ばれる毛のような感覚器がある。

Q3: ミミズには脳みそがありますか？
 A3: 小さな脳みそがあります。

クイズ

アメンボのいる水にどれを入れたらアメンボはしずむでしょう？ ①～③から選んでください。

① お酒（アメンボがよっほらちゅうかそび）
 ② 海の水（しお（おいの）はきらいなのかな??）
 ③ 洗剤（おんなも洗剤いはのんだら体におるいね）

答え ③ 洗剤
 洗剤がアメンボの足の油を分解してしまうから。
 ※ アメンボA4の紙参照。

○ダンゴムシ《クイズ》

Q. ダンゴムシはなぜしてくくく？
 A. 固い殻を敵から身を守るため

Q. ダンゴムシは何の仲間？
 A. エビやカニの仲間
 (節足動物門甲殻綱等脚目) 簡潔に言えば、足が節になったアリアリ、固い殻を持つ生き物。

Q. ダンゴムシが眠るして成長に必要とき、どんなふうで眠る？
 A. 腹が前と後ろにわかれて眠る
 (人間が「ソラリス」を眠るのと違い、逆さ寝)

Q. 丸くならないダンゴムシとソラリスの虫は？
 A. フラミンゴ
 (下図を参照)

図5. 実践にもちいたクイズカード



図6. カードをえらび生物を決定.



図7. 引き当てたカードに書かれた生物の絵に従って、ミミズやダンゴムシを探す.



図8. クイズをして、探し当てた生物(アメンボ)で実験をする(アメンボの浮いている水に洗剤をいれるとどうなる?).

また、授業の終わりには、大学生が作成したアンケート用紙に、今日の感想として、絵を使って記入した。

以下に、大学生の事後の反省・感想を示す。

大学生だけでは、児童を掌握する方法・技術について、うまく議論できないことが予想された。そのため、反省点などを含めて、児童の担任の菅原と話し合う機会をもつことを目標に、できるだけ言葉にして質問できるようにしなければならない。そのために大学生の反省と感想について、自由に話し合った。

＝ 子どもたちの感想に対する大学生の感想 ＝

- ・子どもたちが楽しんでくれたというのがよかったのでよかった。
- ・ミミズに目がないことも、アメンボが「飴ん棒」だということなどわかっていてくれてよかった。クモの問題など、見た目はあっさりして受け答えをしていたのですが、実は感動していたのだということがわかってうれしかった。
- ・またきてくださいという言葉がうれしかった。
- ・アリの絵がなくて悲しい。
- ・アメンボの実験をしてよかった。
- ・うまく知識を伝えられなかったと思っていたけれども、びっくりしたという言葉が結構あってうれしかった。
- ・虫が好きだったけど、もっと好きになりましたというのが、うれしかった。
- ・自分の反省点ばかりマイナスだったけれども、感想を読んだらうれしくなった。
- ・ひらがなをならいたてだったのに、一生懸命に書いてくれてうれしかった。
- ・クモの足が14本と、書いてあって、ダンゴムシと知識が混じってしまった。

＝ 大学生へのアンケート ＝

1) 準備の総合点

0-20点	20-40点	40-60点	60-80点	80-100点
0人	0人	9人	2人	0人

「反省点は？」

紙をみてしゃべるだけ。

子どもたちへの指導能力の未熟さ

2) ゲームの完成度(知識と方法について)

0-20点	20-40点	40-60点	60-80点	80-100点
0人	0人	0人	10人	1人

「足りなかった20点は何が足りなかったか？」

- ・知識が簡単すぎて、「一年生はよく知っていた」（ダンゴムシとわらじ虫の違いをよく知っていた）。レベルがあわなかった。
- ・ゲームとしての完成度は高かったが、方法にとらわれていて、目先の興味にとらわれていて、虫の機能と新たな発見と喜びを教えるべきだったのに、ゲームの進行にとらわれてしまった。優先順位が違う。
- ・調べてきたのがメジャーなものだったので、もっとマイナーな分野（たとえば、土壌生物？手こずって探さなければならぬもの、あの場では？）の生き物でもよかったのではないかな。

3) ゲームの完成度（知識を自分たちのものにして予習がすんでいるか）

0-20点 20-40点 40-60点 60-80点 80-100点
0人 4人 7人 0人 0人

「足りなかった部分はどこか？」

- ・自分が調べたものは、紙をみなくても、言えたが、ほかの班の調べ物は結局行きのバスの中だけだったので、知識がもったいなかったかなと思う。
- ・紙にまとめると、量が膨大だった。伝えたい部分、要点が見えているとよかった。知識を披露する場を与えられなかった。
- ・結構、小さい生き物だと馬鹿にしていた。
- ・自分自身が納得していないと子どもには伝えられない（島野の意見）。

4) 児童の指導（シミュレーションが十分だったか）

0-20点 20-40点 40-60点 60-80点 80-100点
11人 0人 0人 0人 0人

「意見は？」

惨敗でした。どうやってシミュレーションをすべきだったのが、わからなかった。

5) 児童への指導（テクニク）

0-20点 20-40点 40-60点 60-80点 80-100点
11人 1人 0人 0人 0人

9. プロセスIV「児童担任との反省会」

プロセスIVでは、大学生が自ら児童への接し方について、感想や反省点を、1年1組担任の菅原と正味1時間30分程度の対話を持つことによって、今後の教員養成課程での課題に気づき、またフレンドシップ実

践中にえられた気づきについての定着を行った。

以下に、反省会の内容を示す。

担任（菅原）への大学生の質問

[大学生が前もって準備した質問]

- ・単独行動する子どもの扱いはどうしたらよいか。
- ・子どもを引きつけるにはどうしたらよいか（話術など）。
- ・答えを選択制にすべきか、それとも、子どもの言葉で考えさせるべきか。
- ・能力差のある子どもへの対処の違いはどうしたらよいか。
- ・低学年と高学年の子どもには話し方の違いはあるのか
- ・子どものやりたいことを優先させるのか、知識を優先させるのか。
- ・子どもに教えたいことや、伝えたいことをどの程度、教師が教えたり、伝えたりしているか。
- ・網を持ちたい、前に出たい子どもがひとりいたときに、班としてまとまって行動するためにはどうしたらいいのか。
- ・最初に説明したときは、カードを見せたら引くものだと思っていた。「やり方の説明」がうまくいかなかった。虫を探すときも同じであった。

= 以下、やりとりの記録 =

- 質問 -

- ・単独行動する子どもには、どう接したらよいか。
一年生の目線に降りる。外に出ると、周囲の興味があるものにひかれるのは、発達段階の姿だと思う。意図的に興味をもたせようと示しても全員というのは難しい。36人のうち30人くらいがこっちを向いていればいい、というくらいの気持ちでもいいのかもしれない。1時間の授業でその子の評価はできない。あまり完璧を求めないで、余裕を持って子どもを見取るのはどうか。

フレンドシップ実践の授業をみている限りは、そんなに単独行動をとっている子はいないと思う。発達段階から見ると、他のグループと交わって活動してもよいという思いをもって臨んでもよいだろう。単独行動ほどではない。

その場で児童の名前と顔を覚えられなくてもよい。即席でグループを作っているの、ひとりでも名前を

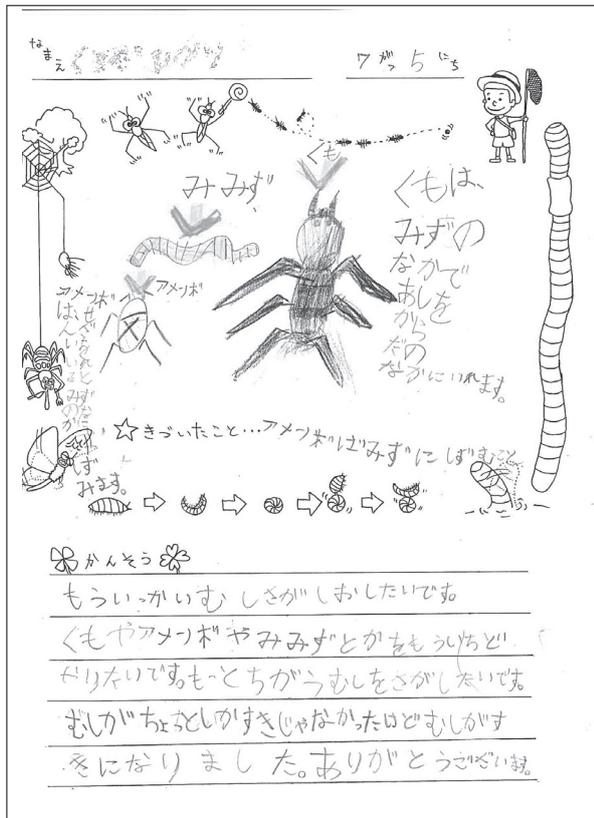


図9. 児童の書いた授業の感想

覚えられたら、いいと思う。授業を2～3回くらいするうちに名前をおぼえられたらいいのではないかな。長いスパンで考えていく必要がある。

- 質問 -

・言葉で引きつけるにはどうしたらいいのでしょうか (話術・テクニックはあるのか)。

テクニックはあるのかもしれない。附属小学校の教員は、全部で24人いるがそれぞれにテクニックがあるのだと思う。ただまねをするのではなく、自分だったら、こんな手法を使うのか。というものを学んだらいい。いろんな本に書いてあるような、話術など細かいテクニックはあるし、いろんな本に書いてある、たとえば、チラチラ見せたりする方法などを研究するのも良い。いずれにしても、自分なら、という部分を押さえておくことが大切である。

ほかに、事前に児童と約束をしておく方法がある。前に人が立ったらそっちを向く、などの約束がある。

耳で聞いてみよう (写真を出して)

目で見ている (写真を出して)

子どもの実態をみることが大切である。

大学と、附属小学校での情報交換は、ほぼメールでおこなったが、このような連携では、細かい打ち合わせは大切であると考えます。

- 質問 -

・答えを選択制 (4 選択問題) にすべきか、それとも、子どもの言葉で考えさせるべきか。

どちらでもよかったのかもしれない。人数が5人なので、対話型をとれたかもしれない。4タク (4 選択問題) というのは一年生はやったことがないので、それはそれで、経験としておもしろかったかもしれない。どちらからいうと、4タクは大人数のときに、方向性をそれないために使うテクニックかもしれない。発達段階によると3タクくらいの選択肢が良いかなとおもう。

今回のフレンドシップ事業の実践によって、児童達の知的好奇心はくすぐられた。一週間くらいクイズがはやった。クイズをして友達と遊び会うということに、皆さんとの経験が生きている。

- 質問 -

・能力差のある子どもへの対処の違い
・低学年と高学年の子どもには話し方の違いはあるのか

子どもとの親密度の違いによってもちがうので一概にいえません。授業中は変わらないのではないかと思います。

- 質問 -

- ・子どものやりたいことを優先させるのか、知識を優先させるのか。

そのときの授業のねらいだとおもう。今回は皆さんが来て児童に教えてもらう。という方式。実際の生活科の授業は逆で、生徒に投げるようにしている。国語や算数と違って、大きな枠しかない。葉っぱや日光の様子で、その場で組み立ててゆくような形をとるので意外と難しい。

- 担任（菅原）からの発言 -

フレンドシップ授業のあと、ダンゴムシを両手に持ってきた児童がいる。

なにかとみたら、ダンゴムシがおなかに卵を抱えているものや、ダンゴムシのあかちゃんだった。フレンドシップ授業で、皆さんが、ダンゴムシの足の数やミミズに目がないことなどを子どもたちに教えてくれたからだと思う。彼らは、理科の先生に、ルーペを借りたり、図書館からダンゴムシの図鑑を照らし合わせていたりしていた。これが、調べ知識ということだと思う。大学生の皆さんには、児童に、物事を斜めから、横から見るという視点を与えていただいた。

しかし、毎回、このような実践方法で授業を行うと、教師主導の授業（教えられ型の授業）になってしまう。今回は1度であったので、ヒントを与えてもらったという点で評価できる。

- 質問 -

私は、子どもになめられていたのかと感じた。子どもに教えたいことや、つたえたいことをどの程度、強引に教えたり、伝えたり菅原先生はされているのか。

知識的にわかっている子どもについては、がんがん、意見をいいあっても良いのかもしれない、こっちが二枚も三枚も上手であることをしめしてやってもいい。その子どもの実態に応じて、知識を与えるなどしても良いが、出し過ぎると押しつけになる。

得意になっている子ども（オタマジャクシがとくいととか）の説明をまずは聞くことが大切ではないか。子どもの知識は意外とインターネットだったり、テレビから得たものだったりする。生き物（そのもの自身）は、実際に見ていない場合があったら、チャンスではないだろうか。そして、逆転できるチャンスがあったらしめたもの、「わかんない」ってなったら、「先生もわかんない」と種をまいておく。すると、「じゃ先生に教えてやろう」というように子どもは頑張って調べて、2～3日したら、また、同じ子どもが調べた知識を持って話に来ることがある。そうしたら、それがその子にとって本物の知識になる。情報を確認することはたくさんある。このように、複数の機会を得て確認させるようにしたらどうだろう。

- 質問 -

- ・網を持ちたい、前に出たい子どもがひとりいたときに、班としての統制をとるためにはどうしたらいい



図 10. 反省会の様子



図 11. (反省会) 児童の書いた授業の感想をみて

のか。

人がやっているのをみて学ぶ、ではなく、できれば、本人にやらせてやりたいと私も思う。これも、児童達との「駆け引き」が重要なのであって、全員にやらせると時間がない場合は、駆け引きで進めるしかない。全体をそろえなければならない、というところが、附属小学校にはあまりない。意外と、型にはめないほうが、枠を超えてできるのかもしれない。注意がそれて集団から離れてしまった児童がいても、「そっちにいかないで、こっちにおいで」といわないで、あえて残った生徒で楽しくしてみる。あれ、僕がこっちにきたけれども、誰も来ないと自分で気づいて戻ってくることもある。きちんと整列などに神経を集中すると、発見する芽がなくなってくる。生き物なんて教室で飼っちゃだめとなると、自然を観察する芽が育たない面もある。締めるときは締めるし、緩めるときは緩めるというさじ加減も必要だ。

子どもは、手の上で育たないし、あふれてこぼれた部分で光った部分がある。

規則正しくさせようと思って、指導していくと、今回のような、自由な感想はでないと思う。

整列をさせるといった見た目を重視するよりも、中身で勝負したらどうだろう。

〔以下、準備した以外のフリーディスカッション〕

－質問－

- ・菅原先生は、子どもの行動にあわせて臨機応変に変えているが、そのような臨機応変さは要求されるか。自分は計画を綿密に立てたが。
- ・最初に説明したときは、カードを見せたら引くものだと思っていた。「やり方の説明」がうまくいかなかった。虫を探するときも同じであった。

指導案通りに進めようとする授業は苦しい授業になってしまう。AでもないBでもない、Cくらいがいいのか、という、全く予想外の展開になる。計画に縛られてはいけなければならないけれども、それでもいけない。

本音で言うと、今日も私が小学校で授業をした時間は、4時間あったのだけれども、私として納得のいく授業はできなかったと思う。私も一年間のうちで、本当にうまくいったという授業はそれほどの数はないと思う。

むしろ、子どもとのやりとりを楽しむくらいで進めることも必要かもしれないね。

－以下、菅原からの講評－

この班は、この虫に限定するような形で、分担を決めて、別々にやらなくてよかったと思う。一つの班に、5種類の生き物を観察させることができてよかった。少人数にわけて、みてあげたおかげで、一人一人、はにかむような子もすくい上げてあげることができてよかった。

K(仮名)君は、「ぼくは、ぜんぶ分かってたよ。」といていたが、彼は、一番虫好き、K君のような子が、クラスでうまく働いてくれる。K君が「かわいーっ」で、やるので、さわれない子も、さわれるようになる。

また、絵を取り入れた感想を書かせたが、一年生は、通常は人物が中心になって、材料は小さくなりがちになり、みんなで楽しくやった絵になるのだが、今回の授業の感想では、昆虫や、ミミズをどーんと真ん中にかいている。今回は、対象を書きたい子が、のびのび表現できる授業になった。

生活科としては、生き物への思いを持って、次の発見、興味へと繋げていく、という重要な時間を過ごせたのでよかった。

10. プロセスV「大学を離れた一日講座の実践」

プロセスVでは、これらを応用して、授業履修者のうち、希望者のみを募り、気仙沼市立教育委員会の協力を得て「気仙沼こども環境学習教室」を開催した。参加した児童は、気仙沼市内の6つの小学校から18名に及んだ(登録者は8小学校30名ただし、翌日が気仙沼みなと祭りという日程のため帰省者もあり、参加取りやめも出たと思われる)。

本報告は、この実践を含まない。詳細は資料に示した。ただし、朝9時30分から、15時までの実践の時間のすべてを、事前の大学生の運営計画で行い、実践当日には、すべての参加した大学生が黒板の前で話し、すべての大学生が野外と顕微鏡を使って実践するという教室は、前日からの大学生の泊まり込み準備(大学から気仙沼市まで車で3時間程度)から、児童の帰宅後の片付けまで、無事に終了した。

附属小学校での実践を通して、大学生が自信をつけ

てきたからだと思われる。環境教育bの授業は、前期にて終了するが、大学生の今後の成長が期待できる実践となった。

11. まとめ

著者のうち島野は宮城教育大学赴任2年目であり、宮城教育大学附属小学校の多大なる協力を得ながら、担任の菅原（著者）とともに進めた実践であった。そのためもあって、実践までのプロセスをあわてず、4段階に設定し、相互の距離を縮めながら、準備を重ね行ったフレンドシップ実践を計画できたことは、最終的に大学生だけでなく、教官相互の自信にもつながった。また、児童にとっては、生活科の内容の一つである「身の回りの自然や生き物とかかわる」という部分で、大学生と一緒に触れ合うことで、小学教員の観点以外から、生物への探求心を養い、生命への興味を育てられたと思われる。生物についてではないが、しばらく1年1組では、お互いにクイズをする「クイズ遊び」が流行した。このようなところも、授業では得られない部分だと思われる。

実践の準備は、島野・菅原間について、菅原も述べているように、お互いの時間がまったく合わず、電話もできないような中で、専ら大学と附属小学校の電子メール交換で打ち合わせが行われた。しかし、実際には、相互に実りのある実践となったとおもわれる。この成果は、お互いの顔を分かり合い、児童と大学教員、大学生と児童、小学校担任と大学生、4者間の人間関係とも言えるものを、時間をかけて作ったことが、支えてくれたのだと思う。今後も、また、このような繋がり「絆」を大切にしながらフレンドシップ実践を進めていきたいと考えている。

謝 辞

宮城教育大学附属小学校には、長期にわたり多大な

るご協力と懇切丁寧なご支援をいただきました。また、気仙沼市立教育委員会・会場の面瀬小学校にも絶大なるご支援をいただきました。また、本学環境教育実践研究センター鶴川義弘教授と大友俊卓さんをはじめ研究室の学生さん方には、取材と記録によるご支援を行っていただきました。この場を借りて皆様に、心より感謝申し上げます。

引用文献

斉藤千映美・見上一幸, 2000. 平成12年度フレンドシップ事業報告. 宮城教育大学環境教育研究紀要, 3: 107-108.

見上一幸・村松隆, 1998. 平成12年度フレンドシップ事業報告. 宮城教育大学環境教育研究紀要, 31: 95-104.

資 料

テーマ: 「土をつくる生き物たち」

期 日: 2006年8月4日(金) 9:30-15:00

会 場: 気仙沼市立面瀬小学校及び近郊の森林

主 催: 宮城教育大学・気仙沼市立教育委員会

参加者: 気仙沼市の小学生(実質参加者18名: 内訳
市立鹿折小学校5名;市立面瀬小学校7名;市立南気仙沼小学校3名;市立九条小学校1名;
市立松岩小学校1名;市立月立小学校1名)

新聞報道:

1) 「初の環境学習教室 気仙沼市教委・宮教大フレンドシップ事業」

2006年8月5日 三陸新報(気仙沼市)

2) 「土の中は虫の王国 気仙沼こども環境学習教室 宮教大事業 児童23人、森で観察」

2006年8月5日 河北新報(気仙沼市)